

タネギンボ *Istiblennius tanegashimae* (JORDAN et STARKS) の匍匐など

熱帯性のギンボ科魚類で海水から出て陸上に匍匐するのがあることは古くから知られている。日本産のものではナベカ *Omobranchus elegans* (STEINDACHNER) 及びカエルウオ *Istiblennius enosimae* (JORDAN et SNYER) に関しては夫々難波庄作氏及び内田恵太郎教授の報告がある(動物學雑誌, 1926, xxxviii, p. 321 及び 1927, xxxix, p. 98)。筆者は 1952 年 7 月下旬八丈島に行く機会を得、他の魚類と共にギンボ類を観察することが出来た。そしてカエルウオと同属のタネギンボの二、三の生態を観察した。八丈島ではタネギンボが絶対多数を占め、いたる所の磯で見られるが、カエルウオは甚だしく僅かに 1 尾が大きな潮溜の中の岩の表面に附着しているもの(恐らく微細な藻類であろう)を舐めるかの様に食べているのを見たに過ぎない。このカエルウオに甲殻類を潰して與えてみたが見向きもしない。草食魚類と言われているが正しくその通りである。尙、カエルウオの幼魚 1 尾の標本になつていたものを東京都水産試験場八丈島漁業現場長菅野裕氏にいただいた。この標本は最初カエルウオでないと思つていたのであるが調べた結果幼魚であることが明らかとなつた。この事に関しては別の機会に述べることにし、この機会に菅野氏の御好意に對して深謝の意を表する次第である。

タネギンボの原記載に際して與えられた圖は雌によつたものと思われ、頭部正中線に皮習が示されていない。雄が成長すればこの皮褶が表われてくることを古い液浸標本で観察していたが八丈島でこの事實を十分に確かめることができた。潮溜の中で雌雄が互に接近し陸ましくしようとする状態を見たが、単にそれだけでそれ以上のことは見られなかつた。7 月下旬では産卵期が既に終つている。そして大小の潮溜には殆んど必ずタネギンボが棲息していた。採集したもので最小のものは頭端から尾端まで 15mm である。斯様な幼魚がしばしば直径 10cm 位の大体圓形の浅い潮溜に 10 尾以上もがいてるのを見たが、潮溜は黒い岩の窪みであり、それに真夏の太陽が照りつけているのであるが、よく生きておれるものだと不思議に思う以外はない。この幼魚が中々捕えにくく手や小さい網などでは殆んど逃げられてしまう。結局小さなシャールで水と一緒に静かに掬うのが最も能率がよかつた。逃げる時には乾いた岩の上をも跳ねながら他の潮溜か海かへ行こうとするのである。机の上で試みて見たが、全長 15mm 位の幼魚が 1 回に約 20cm も跳ぶことが出来る。跳ねるのは内田教授がカエルウオで観察された如く、体の後半部を一側に強く曲げ、急に伸ばして他側に曲げる時に得る力で前方へ跳ねるのである。

個々の成体が水から勝手に出歩くのは見られなかつたが、集團をなして滑かな岩の上を匍匐するのは中々見物であつた。集團をなしてわざわざ水を出るのは何の目的であるか見當がつかない。この集團匍匐を見たのは薄日が洩れる日であつたが、晴天の時でも同様なことがあると思われる。集團は人を容易に近づけない柄の長さ 2m 位のタモ網を使用しても捕えることは困難である。集團匍匐する場合は海水から殆んど垂直な岩をも之に附着しながら登攀して集るのである。体をくの字形に曲げ之を伸ばしては上へ上へと這つて行く(くの字形に体の後半を右側に曲げることが多く、逆に左側に曲げる場合は極めて少なかつたが、之はタネギンボにもともと斯様な習性があるのか、或は光線との関係によるのか、或は岩に取付く際に体が海面となす角度が人間が見ていること等のために何等かの制限を受けるから起るのか等考えて見たがよくわからなかつた)。適当な所に登つてしまうと方向をかえて頭を水の方に向けている。不思議なことに登攀の途中や静止している時に相當激しい浪が打ちつけても決して岩から離れないことである。ヘゼ類やウバウオ類等であれば腹鰭が吸盤の用をなすが、タネギンボの腹側には何等吸着の機關はない。ギンボ類の *Andamia* 属では下唇のすぐ後方に吸盤が発達しているが、この属に近い *Istiblennius* には吸盤らしいものは全くない。幼魚をガラス器に入れて置いた所、トビハゼが腹鰭の吸盤で水面に直角に附着し尾部を水中に没して静止していることがあるが、之と全く同じ形で静止しているのを見た。体の粘液のみでは到底打ちよせる浪には堪え得ないから、口部で吸着するか、口部、胸鰭、腹鰭の間をどうにかして吸着するのだらうと思う。タネギンボの集團に人間が近寄つて行くとぞろぞろ這いながら、場合によつては半ば跳びながら逃げて行き、逃げる場所がなくなると始めて海中に飛込む。しばらくたつとまた這い上つて行くのである。

八丈島の人達はタネギンボのことをケーロメ(カエルメの訛り)と呼んでいる。メは眼ではなく、その他の魚や多くの動物の呼名にも使用されている接尾語である。實際はケーロメはタネギンボのみを指すのではなく、カエルウオも含めての呼名であろうが、八丈島に極めて近縁の之等のギンボ類が少くとも 2 種存在することを八丈島の人達がどれ位知つているかは確めないでしまつた。

(富山一郎)